

## KDDI「AQUOS K」

通称「ガラホ」が実現した、  
数年ぶりの最新型フューチャーフォン

スマートフォンの普及が爆発的に進んだことで、タッチパネルは「新世代のUI」として世間に認識されるようになったように思う。PCや各種リモコン、またプロシューマ機材である音声卓の操作盤がタッチパネル化されていたことには度肝を抜かれた。こうした「タッチパネルにあらざるば……」とでもいうべき勢いに一石を投じることになりそうなのが、KDDIが先ごろ発表した「AQUOS K」、通称「ガラホ」である。

一言で表すならば、ガラホとは「Androidを搭載したガラケー」。もう少し噛み砕くと、旧来型携帯電話のUIをそのままにスマホで扱える機能の一部を搭載した端末、である。旧来のUIとは、もちろん物理的なボタン操作だ。十字キーと決定、各番号ボタンにクリア（一つ前に戻る）ボタンなど、スマホユーザにとってはやや懐かしいボタンが並ぶ。

十字キーほかだけではさすがにサイト閲覧などが苦しいので、ポインティングデバイスとのハイブリッド仕様となっている。

物理ボタンとの切り替えはスムーズかつシームレス。基本的には十字キーなどによる物理ボタン操作がメインとなるが、パッド部分をサッと指でなぞるとポインタが出現、画面から自由に選択対象を選べるようになる。なお、再びボタンを押すとポインタは消える。

ポインタ操作の対象センサーエリア、つまりPCマウス操作でいうところのマウスパッドは操作盤全面、というのもありがたい。全面とは文字通り物理ボタンの表面を含めたクラムシェル端末下側のすべて。可動域が広く使いやすそうな印象を持った。

ポインタ操作時、指を一定時間動かさずにいると、スクロール操作が可能になる。ガラケーでありながら画面上下をサッと送れる様は爽快で、キーを連打していたかつての操作感を思い出すと隔世の感がある。

もちろん、スマホにおけるすべての機能が利用できるわけではない。例えば、人気のアプリ

ゲームの多くはタッチ操作を前提としており、有名な「パズル&ドラゴンズ」あたりで考えても操作不可能なことは明らかだ。

よって、プリインストールされたアプリはKDDIにて用意しており、購入後のダウンロードも同じくKDDIにて開発したサイト（スマートパス）より厳選したアプリとなる。

用意されるサービスはニュース、天気予報、地図関連など。また、各種SNSや動画サイトなども自由に利用できる。現状、数はさほど多くないが、普及状況を注視しつつ徐々に増加させていく方針だそうだ。

## 目指したのは「最新型のガラケー」

「AQUOS K」は従来型フューチャーフォンとしてはかなりの機能性を持つ。あるいはスマホなる端末が存在していなければ、間違いなく「最先端の携帯電話」として讃えられたことだろう。

KDDIの狙いもそこにある。つまり「最新型のフューチャーフォンを開発すること」。利用に制限のかかったスマホではなく、最新の機能を備えたフューチャーフォン。一言言葉遊びのようだが、このコンセプトこそが「ガラホ」に強い意義を持たせている。

「フューチャーフォンをお使いのユーザからは『新型はもう出ないのか』という声を多く聞いていました。今回、それに応えた形です」（商品統括本部プロダクト企画本部プロダクト企画



KDDI「AQUOS K」、通称ガラホ。開いた際の下側全面がマウスパッドになるのがユニーク

1部長・内藤幹徳氏）。確かに、ガラケーとしての進化度合いで言えば、ここ数年にない大幅な向上だ。

いまだガラケーにこだわるユーザたちにとって、端末のフォルムや物理ボタンの有用性はゆずれない一線らしい。確かに、電話をかける際に手さぐりのみでダイヤルから対象先を呼び出すことができていたかつての方が便利だったようにも思える。

一方、そうしたニーズに応えるべく調整されたUIの構築にはかなりの苦勞を要したようだ。「物理ボタンとポインティングデバイスをいかに組み合わせるのか、その調整にかなりの時間を使いました」（プロダクト企画1部・高橋宏明氏）。

将来スマホに切り替えてもらうためのステップとしてだけでなく、いつまでもガラケーを使いたいユーザが満足できる端末。その完成度の高さはもちろんだが、何よりKDDIの顧客満足対応こそ高く評価したい。

